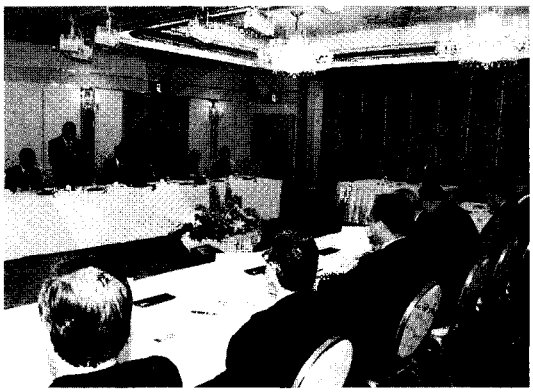
新熊本市史編さんだより

収集史料公開に向けて

市制百周年記念事業として昭和63年から15か年計画で取り組んでいる新熊本市史。その運営方針を審議する第29回新熊本市史編纂委員会（委員長　永野光哉熊本日日新聞社会長）が、昨年5月28日市内のホテルで開催され、平成13年度事業報告のあと、平成14年度事業計画を審議・決定した。


第29回新熊本市史編纂委員会から

質疑では、事業開始以来15年の間に収集した膨大な史料について、その保存・活用を求める意見が出された。事務局より古文書などのコピー冊子約一万二千冊、マイクロフィルム八十万コマ、新聞縮刷版二千四百冊、歴史関係書籍六千冊が収集されたことを報告。その活用方策として、史料原本の所蔵者約八百の団体・個人の了解を得た上で、平成16年中には、公開施設の開設ができるよう準備を進めたい旨の説明がなされた。

新熊本市史編纂委員会の議事の要旨は以下のとおり。

〜平成13年度事業報告〜

●刊行物

研究論文集『市史研究くまもと第13号』、『熊本市史関係資料集第5集―熊本市都市計画事業産業調査資料（大正・昭和期）』、「新熊本市史編さんだより第20号」

●史料収集

近世専門部会

生駒家、村上家、小笠原家、池田家、真野家、三宅家、仲光家、猿木家、永青文庫（熊本大学附属図書館）、熊本県立図書館、八代市立図書館（松井文庫）、玉名市立歴史博物館（村上家）、城南町歴史民俗資料館（東家家ほか）、熊本博物館（吉田家）、河内総合支所ほか

近代専門部会

池田家、慶徳・五福小学校、熊本博物館（井上辰馬氏旧蔵史料）、大村関郎氏所蔵史料、東京市政調査会市政専門図書館（都市計画資料）、国立国会図書館（石光真清関係資料）、筑波大学附属図書館、高松宮ハンセン病資料館、熊本県立図書館、熊本市議会、市立図書館ほか

●史料・図書購入

『江戸幕府日記―柳営日次記』（「徳川実記」の典拠とされるなど資料的価値が高く江戸幕府史のみならず江戸時代史研究に欠かすことのできない基礎資料）、『昭和ニュース事典』ほか

●その他

新熊本市史展示室開設（熊本市古京町別館一階、平成13年9月3日）、新熊本市史ホームページ開設（熊本市役所ホームページ内、平成13年10月20日）

〜平成14年度事業計画〜

●刊行物

新熊本市史通史編第3巻『近世Ⅱ』、同第7巻『近代Ⅲ』、別編第3巻『年表・索引』、『熊本市史関係史料集第6集―熊本市工業生産物調査・職業調査（明治後期）』、研究論文集『市史研究第14号』、「新熊本市史編さんだより第21号」

●史料収集

近世専門部会

三宅家、仲光家、永青文庫（熊本大学附属図書館）、熊本県立図書館、城南町歴史民俗資料館（東家家文書ほか）、熊本博物館、旧細川刑部邸ほか

近代専門部会

大村家文書、国立国会図書館、東京市政調査会市政専門図書館、熊本県立図書館、県立第一高校清香会、熊本博物館、市立図書館ほか

発行日
平成15年3月20日

編集・発行
新熊本市史編纂委員会
熊　本　市
（総務課市史編纂室）

〒860-8601
熊本市手取本町1-1
☎096-328-2038

東京と熊本を結んだ不思議な縁

～東京・村川家文書を収集～

市史編纂室には、市民をはじめ全国各地から市域の歴史に関するさまざまな疑問や問い合わせが寄せられています。その中から今回は、運命が引き合わせたとでも言えるようなエピソードをご紹介します。

平成14年7月9日、東京都在住の村川夏子さんから市史編纂室にファックスが送られてきました。

そこには、「自分の祖先は細川藩の藩士であるが、熊本にある菩提寺の墓を整理して、全てを東京へ移すことになった。明後日熊本に行くので、村川家の来歴に関する資料を見たい。また中島広足※1の遠縁にあたるのでこの機会にその旧居を訪ねてみたい」といったことが記されていました。

村川家及び熊本とのつながりについては、次頁の「村川家について」に書かれてありますが、代々学問でもって藩に仕えたお家のようです。

さて、翌々日の11日、村川夫妻と夏子さんの妹さんが来室されました。編纂室には、村川家の来歴を表す古文書等はありませんでしたが、「祖父堅固が東京帝国大学に入学するまで住んだ」という当時の薬園町59番地を現在の地図に落として、その位置を確認しました。

また、中島広足の旧居は、2年程前に白川の河川改修により取り壊され、現在は更地になっています。そのことを告げると、「もう少し早く熊本に来ることができたなら」と大変残念がっておられました。

その時、村川さんから「現在住んでいる東京の家は、祖父の代に建てた明治末の建物で、蔵の中には江戸から明治にかけての熊本の史料や中島広足にかかわる資料がある」ということを伺いました。

奇遇とはこのこと。折りしもその翌週に市史編纂委員会では東京での視察研修を予定していたのです。そこで、是非その際にそれらの史料をお見せいただけないものかと申し出たところ、「他の機関の調査の可能性もあるが、これらについては熊本の方によって熊本ならではの活用を考えていただきたいので」とすぐにお引き受けいただいたのでした。

今回の視察研修は、編纂事業最後の研修にあたり、事業終了後の史料の活用方策について研鑽を深めるため先進地である東京都板橋区と埼玉県川口市を視察し、その後、東京・永青文庫を訪れて、長きにわたる史料調査協力への御礼を申し上げることとしていましたが、今回のお話で急きょ永青文庫からほんの数分の距離にある村川宅訪問を研修計画に追加することにしました。

目白通り近くのお宅を訪れた時、明治期に建てられた屋敷は、震災や空襲の被害をまぬがれ、大都会東京にありながらそこだけがタイムスリップでもしたかのような静かな佇まいで、門前には欅の大樹がそびえ立っていました。

あいさつもそこそこに早速史料を見せていただきました。古い木箱に入れられた村川家関係の古文書とともに中島広足直筆の文書がかなりの量でまとまってあり、このようなタイミングで貴重な史料と出会えたことに大変不思議なものを感じました。

西南戦争、第二次大戦、数度の水害と編纂事業開始時には危惧されていた史料の不足も、こうして思いがけない形で現在の私たちの前に姿を現すことの一例でした。

編纂委員会視察研修で村川宅を訪問
左から5番目が村川夏子さん

村川家について

村川夏子

村川堅固※2は明治8年に熊本市薬園町に生まれました。その直前に父が早世し、母、祖父母と共に育ちましたが、明治10年の西南の役で家が焼け、寓居で成長した経験から「家はある程度大きく、そして大木があること」という住居に対する精神が育まれたといわれています。

長じて第五高等中学校に入学、折りしも校長として嘉納治五郎が赴任され、東京帝国大学（古代西洋史専攻）卒業後は、嘉納治五郎の秘書として文部省に勤め、2年間のヨーロッパ留学を経て東京帝国大学に奉職しました。

その頃、浅草の隅田川河畔の細川家下屋敷の離れを住まいとしましたが、たびたび氾濫にあい、妻が細川家家職の娘だったので、明治43年に細川邸近く（現在の目白台）に家を新築しました。これが震災、戦災を免れて今日に至っています。

堅固は二男二女を設け、長男の堅太郎※3は父と同じく古代西洋史を専攻し、跡を継ぐ様に昭和43年まで東京大学に奉職しました。しかし堅太郎は学問の専門分野だけでなく父の住居に対する精神も受け継ぎ、終世変わる事はありませんでした。

さて、堅固はその後、千葉県我孫子市の手賀沼べりと神奈川県藤沢市鵠沼の海近くに別荘を持ちました。嘉納治五郎は我孫子の別荘所有者の先駆けで、その影響により堅固も大正半ばに土地を求め、水戸街道我孫子宿の本陣の離れを移築した他、朝鮮風の一棟を建てました。一方鵠沼別荘は、堅固の熊本以来の親友である宇野哲人氏を招じ、隣り合わせに建てました。なお哲人御夫妻は堅太郎の結婚の媒酌人もお務め下さいました。

終戦直後に堅固が亡くなり、以来堅太郎は目白台、我孫子、鵠沼の三か所を苦労を重ねて持ち堪えてきました。とりわけ目白台には堅太郎が丹精した苔庭があり、平成3年に堅太郎が亡くなった際、我孫子と鵠沼の両別荘地を物納して目白台の救済を図りました。宅地化が加速する中にあっても両別荘地は緑濃い一角を成し、堅固、堅太郎の精神を表しています。これらの現状保存を願った堅太郎の遺志を両自治体が汲み取り、収納後、平成8年から我孫子は社会教育施設、鵠沼は都市公園として市民に利用されています。

平成8年には文化財を登録する新制度が発足し、目白台の家は大河直躬千葉大学名誉教授（日本建築史）のお勧めを頂き、平成10年春から登録文化財になっています。しかし制約も保護も少ない制度のためサラリーマン家庭では維持に限界があり、次第にその刻限が迫ってきています。

この間に蔵の中を改める機会もあり、収蔵品もいたずらな処遇はできないと思うようになりました。先人が時間をかけて培った建物、庭、収蔵品の先々を考える事は大変な課題です。

このたび熊本で、幼少の堅固が見た物を辿る様に富重利平の写真を眺め、目白台の家は焦土の記憶の結実であり、時空を越えて熊本と繋がっていると感じました。その家の中で久しく眠っていた文書類が、墓地整理のために熊本と無縁になる段に至って、今日的方法によりふるさとで記録保存されるという望外の活路を得ました。巡り合わせの言いがたい不思議さを思うと共に、熊本市のお取り計らいに深く感謝するものです。

現在、史料は熊本にお借りして目録整理ののちマイクロ及び写真撮影を済ませ、3月末に返却の予定です。

※1 **中島広足**　寛政四年（1792）～元治元年（1864）。国学者。現熊本市生まれ。長瀬真幸の門に入り専ら国学を修めた。後、長崎に遊び、家塾を開き子弟に歌学を教授すること20年余、安政四年（1857）招かれて大坂に転居、文久元年（1861）藩命により熊本に召され藩校時習館の国学師範を命じられた。国典・歌道に関する著書多数。（熊日新聞社『熊本県大百科事典』より）

※2 **村川堅固**　1875～1946　東大西洋史学の御大。日本史の黒板勝美、漢学の宇野哲人（熊本市名誉市民）、江戸文学の藤村作らと並んで東大における五高出の花形教授として鳴らした。無類の勉強家で、五高時代は成績抜群、特待生の恩恵に浴す。当時ラフカディオ・ハーンは五高教授で、村川氏は文芸に趣味を持ち雑誌部員となる。（熊本大学『五高人物史』より）

※3 **村川堅太郎**　1901～1991　西洋古代史家。東京帝国大学教授村川堅固の長男。昭和5年（1930）東京帝国大学文学部西洋史学科を卒業、第一高等学校教授を経て昭和15年東京帝国大学助教授に就任し、同二十二年教授に昇格、同四十三年の定年退官に至るまで古代ギリシャ・ローマ史研究の第一線に立つとともに後進の育成に努めた。その学問的業績は、ギリシャ・ラテンの古典に対する深い素養と、厳格にしてかつ世界的視野に立つ歴史解釈とに裏打ちされ、国際的にも第一級の価値をもつ。（吉川弘文館『日本近現代人名辞典』より）

隠密の描いた熊本城と城下図

――徳川家関係に二点所蔵――

熊本城総合整備計画委員会　副委員長
石井清喜

江戸時代の肥後藩は、加藤・細川両家とも全国の外様大名のなかでも四番目の石高を持った大藩である。その居城熊本城には五階以上の多層櫓が七基もそびえる大城郭であった。それだけに幕府も動向を常に注目し、城の規模・入城への道路図・城内櫓図・城周辺の町割りなど詳しく知ろうとした。これらのことを物語る絵図が、徳川家の菩提寺や御三家関係史料を中心に作られた図書館に二点残されていることがわかった。

一つは東京都港区芝の増上寺にある三康図書館。増上寺は徳川家康をはじめ七人の将軍を祀る宗家の菩提寺で、とくに幕末に将軍家茂に輿入れした皇女和宮の木像があることで有名。明治元年（一八六八）四月に江戸城が開城され、書物蔵などにあった徳川宗家の文書史料はほとんど増上寺に移された。この膨大な史料を知った安田善次郎・堤康次郎氏らは図書館を作ることを計画。これに既に図書館計画に乗りだしていた大橋佐平氏が加わり協同して三康図書館として増上寺境内に設立された。

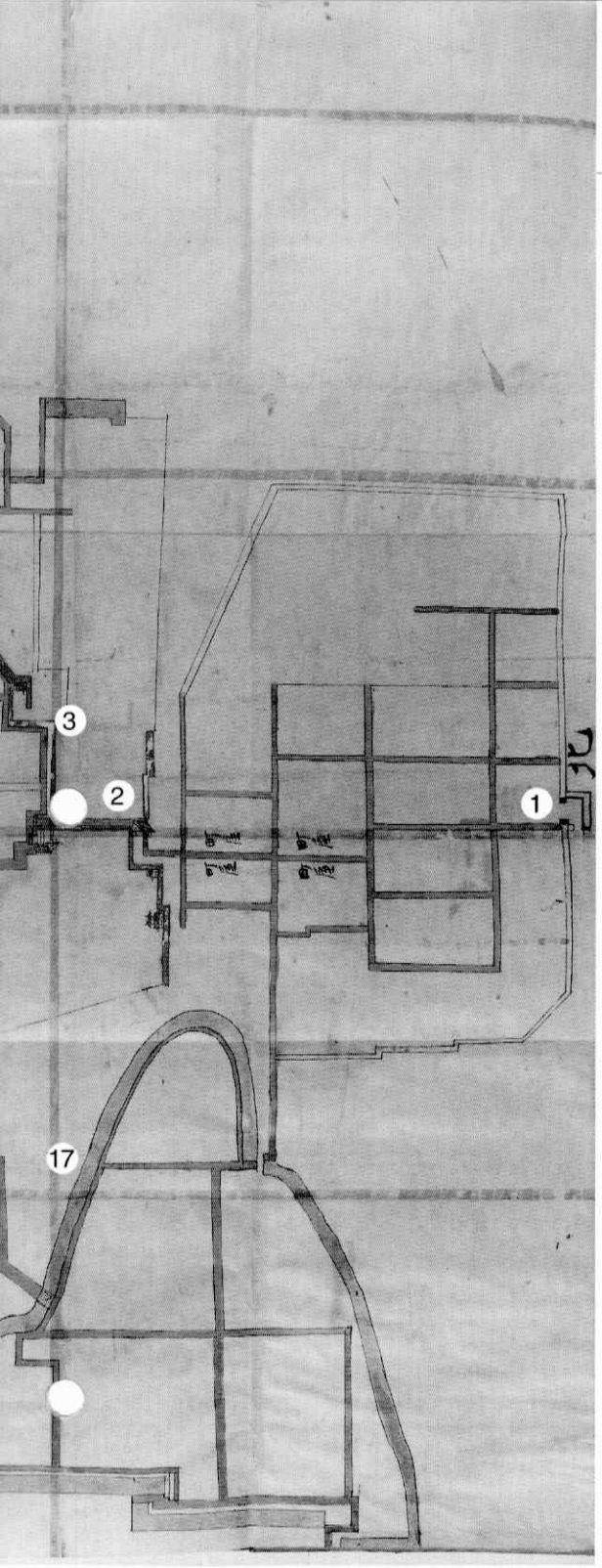
同図書館に保存されている「肥後熊本城図」は、一一五センチ×一六〇センチ（著色、紙本）の大判。描かれている特徴をみると、城図には城下町が含まれ、坪井川と井芹川、南の白川に囲まれた地域が総構えのうちとしている。

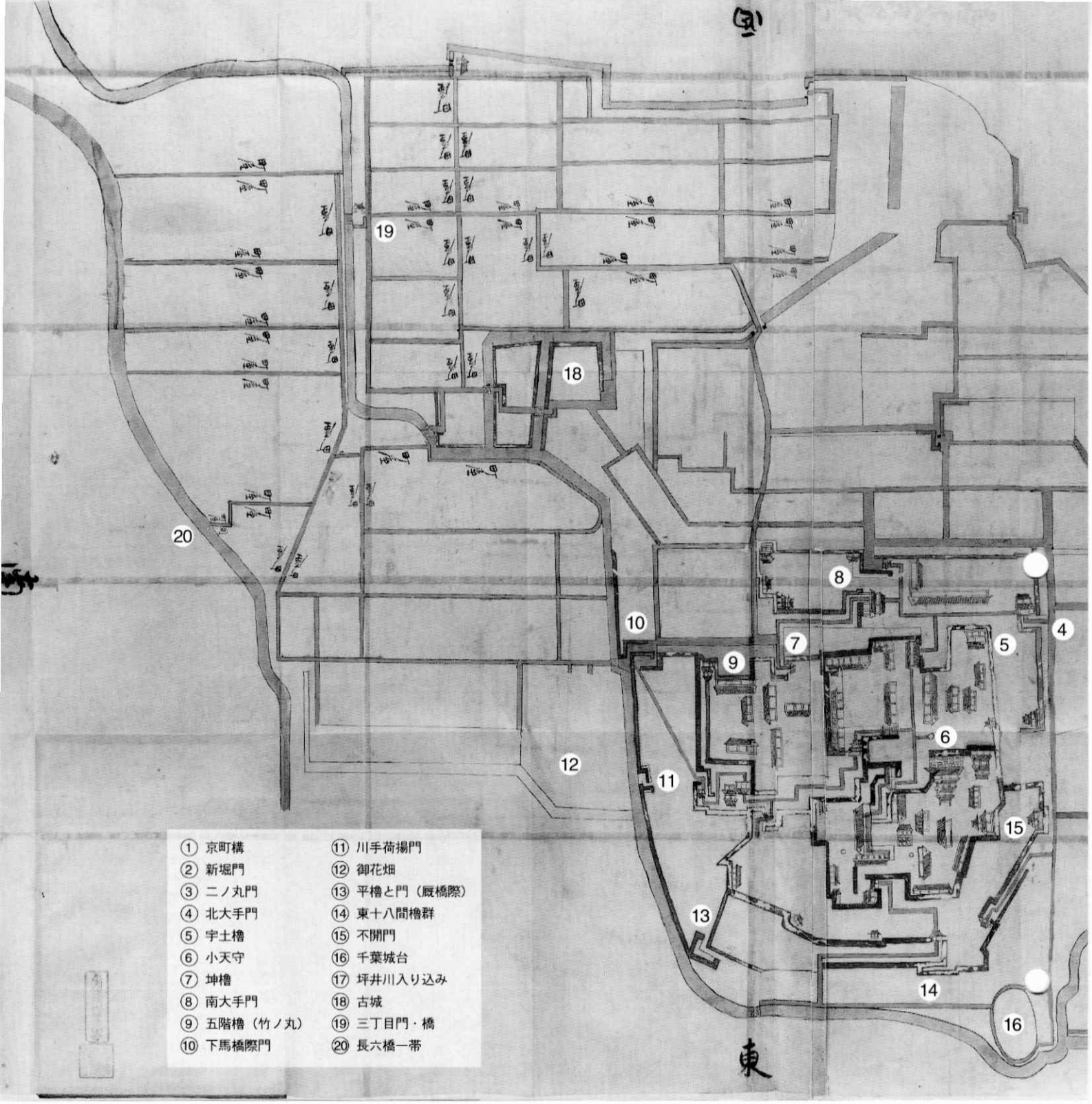
ところが坪井川に併行している唐人町・細工町には一画一寺の町割りが白川端まで通り、さらに白川を隔てて新町・職人町にも同じく横町が等間隔で北東に走っている。

本来唐人町筋はやや北寄りに走り、新町筋とは折れた形なのだが、二つの町筋を一直線に北向きに描いたため、古城の曲輪の横を走る堀端も南北に一直線になっている。

熊本城の周りを流れる坪井川もこの絵図では現在の京陵中学校付近で京町台寄りに大きく曲り、千葉城へ向かって斜めに流れて、千葉城に沿っている。ここでは北方から来た別の水路と合流している。大きく湾曲した坪井川の先端はかつての京町構えの近くに及んでいる。また埋門と北大手門との間も直線で、北大手門、つまり現監物台（正式には刑部預櫓）の東北には多層櫓が書かれている。

この絵図で特に詳しく書かれているのが城内。まず藩主の御花畑邸の前の坪井川には升形をした荷揚場がある。馬具櫓と書物櫓の間から入城すると進路図が色分けさ





肥後熊本城図（増上寺・三康図書館蔵）

れ、独立櫓をまわって地蔵門に至る。そして現在の宇土櫓から来た道と合流し、耕作櫓門から闇御門（くらがり）に上って、本丸御殿前に降りる。大小の天守前には長局、裏御五階櫓など八棟の建物もある。

とくに長塀沿い石垣の途中にある荷揚場は、かつて熊本城総合計画案の諮問を受けて答申した「フィールドミュージアム熊本城」（昭和六三年提出）の研究中に発見した寛永六～八年（一六二九～三一）の「熊本屋舗割絵図」には明記されている。しかし寛文一二年（一六七二）の「熊本城廻絵図」には書かれていない。したがって約三十年の間に撤去され、現在のように長塀のみになったことがうかがえる。

また月見櫓西側の加藤・細川二重石垣下には現在石段があるが、寛文一二年絵図では櫓門と塀が書かれている。しかしこの絵図にはそれらしいものは描かれていない。これは後代になって石段を築き、門などの備えをしたものと思われる。

本丸で注目されるのが、小天守と裏五階櫓との間に設けてある両側から降りられる摺り鉢石段と潜

（くぐり）り石門が書いてないことである。これは延宝二年（一六七四）以前と思われる「肥後国熊本城廻之絵図」には石垣が示され、文政一一年（一八二八）図には「トキ埋門」とあるので、大天守築造のあと小天守が併設されたころに設けられたものではないだろうか。

また古城の周囲の水堀も正確に描かれていたり、本丸まわりの多層櫓もキチンと書かれている。ということはこれを書いた人物は城内に入っていることになる。つまりは他の目的を持った侍が目で覚えたことを肥後滞在中に書き写し、のちに幕府に提出したことがうかがえる。

この絵図からわかることは、全体図をはじめ城内の櫓の配置など極めて詳細で正確である。いわば将軍家なり幕府は詳しい熊本城図を把握していたわけだ。とくに本丸に至る道さえ色分けしてあることからみて、攻城の際のことも考慮に入れていた。

二つ目の史料は、御三家の一つである紀州徳川家に伝えられた史料のひとつ。紀州家は伝来の史料などを基に明治初期に南葵文庫を設立した。しかし大正一二年の関東大震災で東京帝大図書館が全焼したので、この再建のため寄贈された。「肥後国熊本城下図」は、紀州家が独自に収集した全国城絵図の中にあった。紙本、墨書（八六・二センチ×一二七センチ）で、簡単な線書きながら、熊本城を中心に西山まで総構えを描いている。

本丸の特徴は、大天守は独立しており、横に「三がいやぐら」が二棟ある。一つは小天守とみられ、一つは裏五階櫓らしい。大天守の南には「千枚敷」とあり大広間がある。大天守の西に櫓らしい四カクの書き込みがあって、大手口とある。本丸をとりまく櫓は十四基。その中はすべて「侍町」だ。その外側のいわゆる飯田丸などの外曲輪には十六個の櫓を描いている。

これを書いた人物は、京町筋の豊前街道を南下したらしく、北側が詳細で文字も北向き書きである。

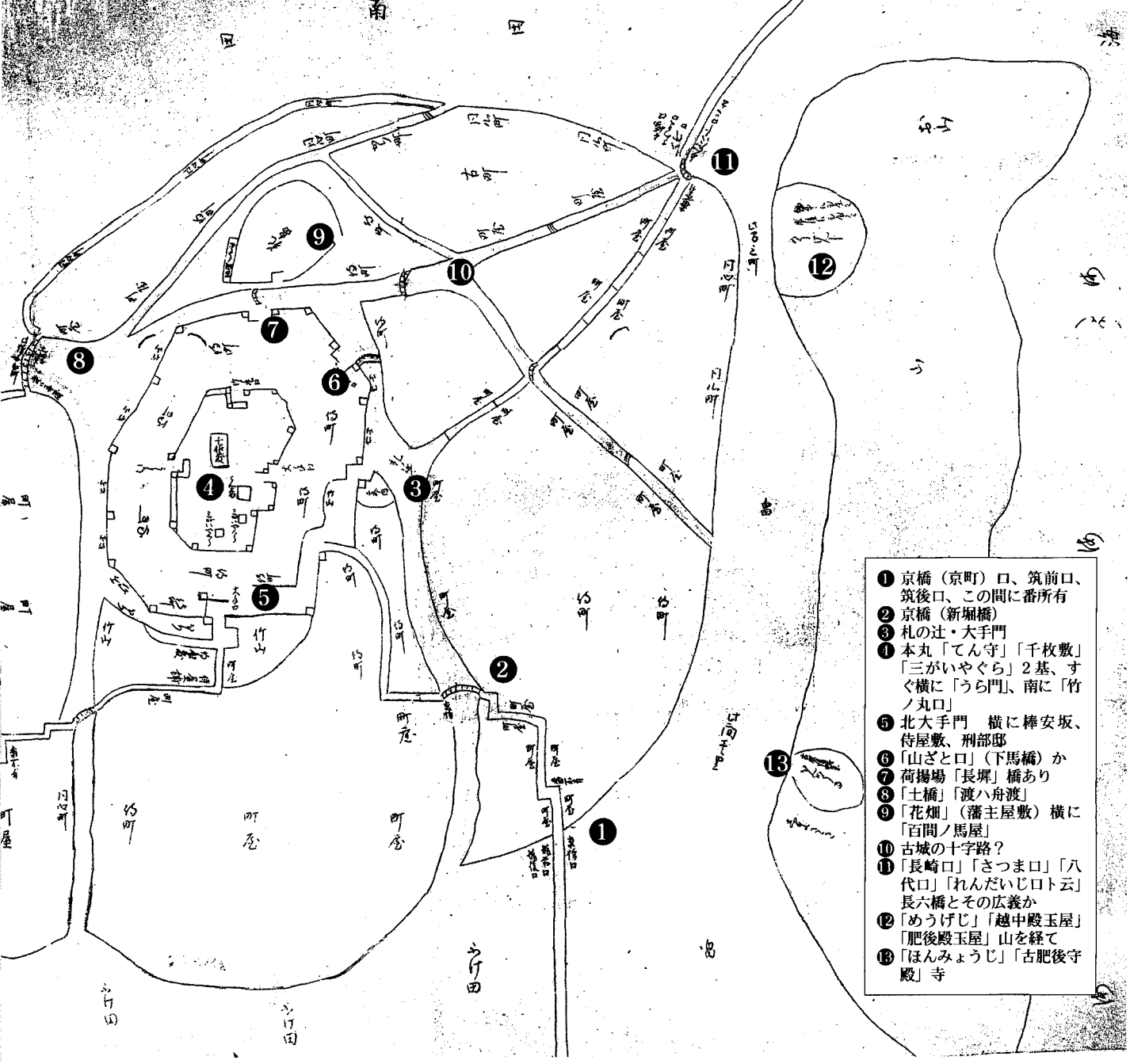
図によってまず❶が京橋口・筑前口・筑後口と書き込みがあるが、恐らく京町のことと思われる。この先に番所有とあり京町構えをすぎて曲がると京橋とある橋を渡っている❷。道なりに進むと右方が❸の札ノ辻と大手門。左方には❺が北大手と思われる櫓と升形がある。ここはもう城内で十八ヵ所の櫓で囲まれている。この櫓群と石垣の点の間はすべて侍町。その奥に本丸❹があり、中央に「てん守」があり独立している。近くは「三がいやぐら」二基があり、大天守の南に「千枚敷」の大広間もある。ここの南口の「竹ノ丸口」❻には櫓と升形がある。すぐ下が長塀と思われ、対面する「花畑」❾の藩主邸との間に「荷揚場」❼がある。花畑の東には「百間馬屋」も書かれている。

この川を下ったところに橋があり、「れんだいじ口」「八代口」「さつま口」⓫とあるので長六橋である。花畑邸の下には白川とみられる川があり、同邸を含む一帯は古町を含めて中洲のように描かれている。この東方に大きな橋があり、「土橋、渡り舟渡」❽と書き込まれているので、安巳橋ではないかと思われる。また西方の丸囲みに「めうげんじ（ママ）」⓬とあり〝越中殿玉屋、肥後殿玉屋〟とあるので妙解寺である。さらに山つづきの北方にも「ほんみょうじ」⓭とあり、「古肥後殿寺」とある。

細川光尚（肥後守）は、慶安二年（一六四九）十二月、江戸で急逝した。三十一歳。ただちに泉岳寺で火葬されて遺骨は、翌三年正月に熊本に運ばれ、北岡妙解寺に葬られた。これらの諸書き込みからみると、慶安三年から元禄十年（一六九七）ごろに作られたのではないだろうか。とくに増上寺絵図は細工町と新町の町筋が一直線になっていたり、坪井川が異常に京町台に接近しているものの、城内の櫓や建物の配置は綿密に調べられている。

南葵文庫図は一筆書きで本丸を中心に調べ、城と町人町の関係、侍町のありようを調査している。内容の間違いから考えると、熊本には割に短時間滞在し、あちこちを歩いて各地点を記憶し夜に覚えた所を書いたため、札ノ辻と大手門や京町から北大手への道程に狂いが生じたものと予測される。

各藩のことを記した公式の出版物としては武鑑があり、家系・家紋、家老名などが出ている。しかし幕府ではこれとは別に度々各地に隠密を派遣して、大名領の内実や治政上の評判などを調べている。この調査記録として残っているのが「土芥寇讐記（どかいこうしゅうき）」や「筑前筑後肥前肥後探索



肥後国熊本城下図（南葵文庫図・東京大学蔵）

記」である。

土芥寇讐記は、元禄三年（一六九〇）に大名家二四三家について家系・略歴・居城の規模・領主の人柄・評判などを四三巻にまとめたもの。肥後藩では細川越中守綱利が記載され「悠然トシテ智恵有リ。仕置ハ大様（応揚か）自ヲ勇力ニ誇リ血気盛ナルハ匹夫ノ如シ」と辛辣に評している。同時に高瀬新田藩の細川妥女利昌、宇土支藩の丹後守行孝らも記されている。

筑前筑後肥前肥後探索書は、幕府御庭番であった伊賀の隠密が寛永四年（一六二七）から調査した報告書の写し。子孫から水口町図書館に寄贈されたときは、肥後の項もあったが現在では脱落している。記載された西国の各藩については、家老の屋敷から城の図面、石垣の高さやつくろい、矢倉の工事の有無まで書かれている。細川家では小倉藩主として細川忠利、三人のおとな（家老）として松井式部興長、有吉頼母英貴、米田監物興季が登場、城内のことも記載されていた。肥後の分では当然加藤忠広が書かれていた。

この二つの絵図について、フィールドミュージアム熊本城の作成に当たった崇城大学の松本寿三郎教授は「現存する熊本城の諸絵図とたいへん違っている点も多い。しかし違っているからこそおもしろい。城の探索を目的に来熊した人物の目に城と城下町がどう映ったかがわかる。この絵図が土芥寇讐記などにすぐ結び付くものではないが、何らかの報告に添付したものではないか。在熊の人なら絶対に間違わないところが違って書いてあり、また建造物の書いてあるさまも興味を引く」と言っている。

郷土研究をめぐる人々 ③

新熊本市史編纂委員会委員　鈴木　喬

大正期になると、歴史的遺産の保護が国の法律で幅広く実施されることになった。明治期に定められた「古器物保存法・古寺社保存法」に加えて、大正八年に「史蹟名勝天然記念物保存法」が制定されると、それらの調査は各県の教育会に委嘱された。県の教育会はこれを各郡教育会に委嘱したので、郡教育会は地元の学校の先生達を動員して調査を行うことにした。そうなると地元の先生達は嫌でも歴史遺蹟の価値を評価するための勉強が必要となり、また調査の成果を基にした郷土教育に重点を置かざるを得なくなる。こうして小学校訓導から中等学校教諭まで郷土史研究と郷土教育に強い関心を示す時代になってきた。しかし、そのためには基礎となる知識の学習と研究組織がまず必要である。その要望に応じて生まれたのが「熊本地歴研究会」で、その中心になったのが、大正一二年に五高教授として着任した鈴木登であった。

鈴木　登

鈴木登（すずきのぼる　明治二一年・1888～昭和二九年・1954）は号を蝸牛（かぎゅう）と言い群馬県の出身、京大史学科を了（お）え、大学院在籍中に五高赴任が決まった。

当時の熊本は政争県の名にふさわしく、憲政会系の九州新聞が火花を散らして対立しており、ひとたび政権党が交替すれば、県知事以下末端職員までの首のすげ替えが行われ、その弊は警察でも巡査まで、小学校では平教員にまで及んでいた。しかし国立高等学校教授には政党の手も及ばなかった。というより、むしろ新聞紙面の教養・文化面の高度化のために寄稿を求められる立場にあったから、聖域視していたためであろう。

このような雰囲気からも、学識・温厚篤実さでも郷土教育と歴史研究団体の長は鈴木が適任であった。このことは両新聞社の文化欄記者豊福一喜（九州）と下田一喜（九日）の両ベテランが、ともにこの研究会の会員になって、終始この会に好意的な記事を載せ続けたことで明らかである。

新谷周蔵

小学校訓導達の中心リーダーは新谷周蔵（しんがい）と富島末雄であった。新谷は大正末期に山崎小校長に抜擢された人である。砥用町出身の熱血漢で、山崎校を中心に最初の「熊本市歴史研究会」の事務局長となった。後に県視学にもなり、最後には砥用町長を勤めた。また富島は秋津町の出身で黒髪小学校時代に新谷の跡を引継いで「熊本地歴研究会」の事務局長を勤めた。退職後には秋津村長となり、熊本市合併のときは横井小楠旧居の保存を合併条約に列記し、「秋津村略史」を急遽上梓している。

当時の研究会の活動状況を見ると、研究会の会合は月に二回、会誌の発行も月刊、史蹟実地踏査を年七回、研究授業年三回というのだから、これを学校業務と併せて実施していくのは大変な重労働であったが、成果は着々として挙がった。また昭和二年からは夏期特別講習会を開催して五高や専門学校の教授連を講師とし、時には鈴木の人脈で中央講師を招聘して教養の向上に成果をあげた。

当時の熊本市長山田珠一は名市長でもあったが著名な漢学者であり、市職員の希望者を集めて講義を行っていた。推されて九州日日新聞社長も兼ねていたが、政党人の我侭（わがまま）は許さず、すべての人とは人格で交わりを持った。政友会系の九州新聞社社長高木第四郎とも普段は面会もままならなかったが、高木が重体に陥った時見舞いに訪れて、二人だけの水入らずの会談に耽（ふけ）り固い握手を交して永遠の別

れをした話は有名である。

山田市長在任中の昭和六年は、大熊本市成立十周年に相当するため、市はその記念式典の日を期して『熊本市史』を刊行することにし、編纂を平野流香に委嘱した。先号にも記したように、平野は専心没頭したが、彼の完全主義が不安を増大させて心身ともに動きがとれなくなり、十周年記念日も過ぎ、天皇行幸の大演習も終了したが見込みが立たない。心配りでは人一倍の山田市長はこの成り行きに心を痛めたが、平野のプライドを傷つけずに編纂意欲を取戻させるには、優秀な複数の助手に協力させる以外に方法はないと考え、その人選を地歴研究会長の鈴木に委嘱した。鈴木も敬愛する市長の依頼であり、片や平野は研究会の賛助者であるから慎重に人選して、壺川小学校新谷周蔵・同校訓導笹原英三郎・同三宅森市、黒髪小学校長富島末雄、出水小訓導河野享、五福小訓導富田忠雄の六人を推薦した。市長はこの六人を呼んで親しく激励するとともに、前一新校長佐藤八郎と前春竹校長植野廉太にも応援を懇請している。

富島末雄

地歴研究会の六人は以後平野の手足となって実地の調査と史料の蒐集に奔走した結果、平野の執筆も進捗したが、平野は現代編の分担執筆を六委員に提案するまでに心を開いた。その結果第一二章の五節から一〇節までの一四〇頁（全体一〇〇〇頁）を六委員で執筆し掉尾を飾ったのが、昭和七年三月のことであった。

鈴木はまた中等学校教諭達の資質向上に役立てようと考えて「本読み会」構想を持った。当時は公共施設の小集会場は少なかったので十数人程度で毎月集まるには個人の家庭の広間を使う以外に方法はない。そこで鈴木は適当する家を捜して移転した。二階が一四畳あって読書会には格好の広さであった。購読する本は六国史から東鑑・神皇正統記等の史籍で、本読み会参加者は一四～五名でほとんどが地歴研究会員であった。講師は交替で勉強してきた者が担当するというきまりであったが、市立高女の森本米一が担当することが多かった。彼は「地歴研究」の編集にもかかわっていたが、のち大連中学に転じ、戦後引揚げて来てからは京都府の宇治田原の維孝館中学校長となった。後には京都の城陽市史の編纂にも携っている。この本読み会には、講読史籍を持たなければ参加する意味がないので、鈴木は毎回自己蔵書の中に同じ講読史料が複数あるかどうかを確かめていた。本読み会常連は森本の他に中原春芳・平野芳洲・合田栄作・中川齊・楯岡不二人・古林光雄等であった。

年七回の実地踏査は日帰り歴史ハイキングであった。バスの普及していない時期なので鉄道を利用する外はすべて徒歩で、会員とその子弟、師範の学生等五～六〇人の集団見学旅行であった。この実地踏査には歴史関係で平野流香、地理では下間忠夫、異色の参加者では熊本測候所長青木成一、同所員早水逸雲等の参加もあって各々蘊蓄を傾けて指導した。筆者なども毎回参加したが、耆町橋がまだない頃に筏渡しで緑川を渡ったことや、玉名の永安寺古墳が地上に顔を出した直後の鮮烈な朱の色が今も目に焼きついている。

年二回行われる会員発表会も大盛況であった。会場は明麗館二階で、発表希望者は常に一人二〇分の二〇名をオーバーした。発表者にとっては全県下の研究者に認められるチャンスであり、会誌や新聞紙上に登載されて後々まで残ることだから懸命であった。考古学の坂本経堯や球磨の高田素次もここから人々に一目おかれるようになった。研究会は八代・玉名・球磨に支部も出来て、支部活動も盛んであった。

こうした地歴研究会の活動も日華事変の泥沼化に伴って翳りが出てくる。昭和一二年に国は文部省に教学局を設けて思想統制を強化し、教育に関しては一切国家の指令に従うべきものと指令した。ついで翌年国家総動員法に基づく物資統制令で会誌の発行ができなくなり、やがて太平洋戦争に突入して総力戦の渦に巻込まれてしまうのである。

昭和二〇年七月一日夜の空襲で新屋敷を中心とする学者の町は大方全滅し、鈴木以下五高・高専の教授連は万巻の書とともに一切の家財を失い、学問の道は暫く途絶えるのである。

市史トピックス

市史編纂事業の過程で、平成14年に収集した史料の中から、主なものについてご紹介します。

東京市政調査会

東京市政調査会は、大正一一年二月、当時の東京市長後藤新平を創立者として設立され、都市問題・地方自治に関する調査・研究が続けられてきた。付属市政専門図書館には、都市問題、都市政策、都市計画、地方財政、地域経済、地方自治といった分野を主にした蔵書があり、他所では容易に見られない資料を数多く所蔵している。

市史編纂室では、『熊本市史関係資料集』第5集に掲載した「熊本の都市計画」「熊本都市計画概要」「熊本市上水道概要」「熊本都市計画参考資料」「熊本市産業調査資料」「熊本市電車事業報告書」等の都市計画関係資料の収集を行ってきた。今年度は、大正～昭和初期の「熊本市歳入歳出決算書」、明治～昭和初期の「熊本市勢要覧」を収集した。熊本市では、戦災・水害などで戦前の行政資料が多く失われた。特に大正～昭和初期のものは少ない。これを補填するものとして重要な資料である。

石光真清関係文書

石光真清の海外旅券
(国立国会図書館蔵)

石光真清は、慶応四年、現在の熊本市本山町で生まれた。少年時代、神風連の乱や西南戦争を身近に見聞する。その後軍人になり日清・日露戦争に参戦した。一生の大半をシベリア・満州での諜報活動に従事し、波乱に富む生涯を送った。その自伝的手記は、『城下の人』をはじめ『曠野の花』『望郷の歌』『誰のため』四部作として刊行されている。平成六年には熊本県近代文化功労者として顕彰された。国立国会図書館には、石光真清の史料が約三〇〇点所蔵されている。内容は、書簡、手記、軍関係、諜報活動関係、事業活動関係、写真等である。市史編纂室では国会図書館で作成されたマクロフィルムを複製し収集した。現在、向山校区で郷土の歴史・文化を生かした地域づくりの一環として、石光真清生家跡の保存運動が行われている。歴史講座、講演会も開かれており、石光真清の研究もさらに進むものと思われる。この史料が新熊本市史の編纂のみならず今後各方面で活用されることを期待したい。

井上家文書

熊本市立熊本博物館に所蔵されている。史料は、藤富村・熊本市の行政関係、熊本県教育会関係、歴史研究、教科書、出版物、日誌等に分けて整理した。これによると、井上家は藤富村に居住しており、農会長や村長を勤める有力者であったと思われる。しかし系図・先祖付などがなく、近代以前の出自等詳細は分からない。行政資料には、戦時中の藤富村の資料、昭和一四年から発行されていた「熊本県常会報」が含まれており、戦時の行政の状況を知るてがかりとなった。また、史料の主な関係者と考えられる井上辰馬は、九州学院の歴史・地理の教員をしており、

日誌抄

平成13年（2001）10月～平成15年（2003）2月

平成13年
10・3　近代史料調査（東京市政調査会）
10・13　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容構成について）
10・19　近代史料調査（通史編「近代Ⅲ」の内容構成について）
10・20　新熊本市史ホームページ開設
10・23　近世史料調査（熊本大学附属図書館永青文庫）
11・1　近世専門部会（通史編「近世Ⅱ」の内容構成について）
11・7～9　全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会出席（長野市）
11・10　近世史料調査（真野家文書）
11・19　第73回部会長会議（平成13年度事業経過報告について）
11・20　『熊本市史関係資料集第5集』発行
11・27　第29回新熊本市史編纂委員会（平成13年度事業経過報告について）
12・1　市史編纂だより第20号発行
12・4　近世史料調査（城南町歴史民俗資料館・東家家文書）
12・7　第73回近代専門部会（通史編「近代Ⅲ」の内容構成について）
12・8　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容構成について）
12・10　第74回部会長会議（編纂委員会について）
12・20　近代史料調査（市議会議事録）

平成14年
1・7　近世史料調査（城南町歴史民俗資料館・東家家文書）
1・11　近代史料調査（慶徳・五福小学校史料）
1・12　第65回近世専門部会（通史編「近世Ⅱ」の内容構成について）
1・17　近代史料調査（高松宮ハンセン病資料館）
1・25　第74回近代専門部会（通史編「近代Ⅲ」の内容構成について）
1・26　ふれあい出前講座（清水公民館：明治～大正期の熊本市政について）
2・9　第66回近世専門部会（通史編「近世Ⅱ」の内容構成）
2・11　ふれあい出前講座（白藤公民館：熊本市の市街地化について）

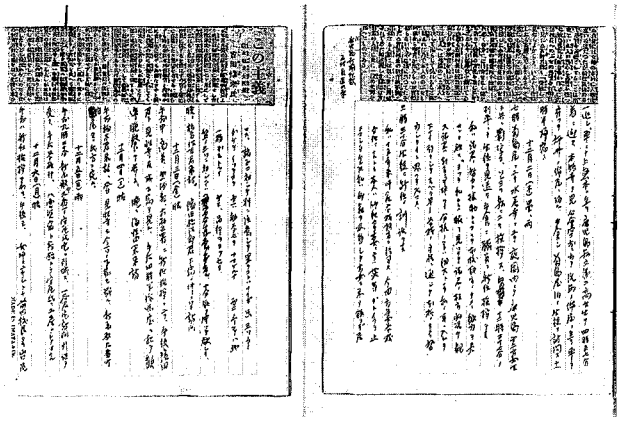
熊本県教育会・肥後文教研究所にもかかわっていた。その関係で、熊本県教育会、歴史研究資料、肥後文教研究所に関する史料がある。さらに明治二八年から昭和一五年にわたる日記が残っており、中身を詳細に検討することによって井上辰馬自身のみならず当時の世相や歴史研究についても解明されることがあると思われる。様々な可能性を含んだ史料である。

ダルトンプラン関係史料

大正一二年、第一高等女学校でダルトンプランという教育の実践が行われた。学級一斉授業をやめ、生徒は教師から各学科目別の指導案をもらい、毎週自分で計画を立てて学習を進め、月末には責任を持って完了する仕組みであった。その実践に当たったのは校長吉田惟孝で、イギリスでの実践校を視察しアメリカに発案者パーカストを訪ねている。ダルトンプランは全国的評価を得、見学者も相次いだが、文部省の自由教育弾圧により大正一四年三月で終了、吉田惟孝は北海道に転任する。大正自由教育の実践として今でも語り継がれている。

吉田惟孝

第一高校の同窓会清香会には、ダルトンプラン関係の史料が保存されている。その中から、研究書や吉田惟孝の日記のコピー等を収集した。イギリス・アメリカ視察の日記、吉田自身の研究が含まれており、ダルトンプラン実施までの吉田惟孝の思想の変遷もうかがえるものと思われる。この史料は近日発刊の通史編「近代Ⅲ」にも活用されている。



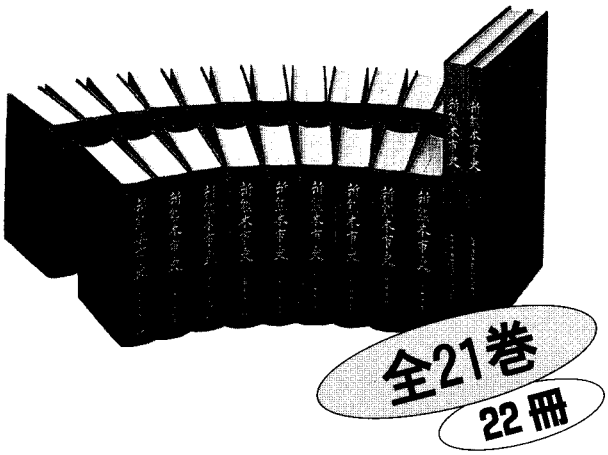
来熊したころの吉田惟孝の日記

小学校所蔵史料

熊本市内には、創立百周年を越える小学校が数多くある。各小学校では、小学校の歴史が編纂・出版されているが、その中に地域の歴史も記述されていることが多い。それは地域の歴史を知る上で貴重な情報源になっている。自校の史料のみならず、編纂の過程で収集された史料を所蔵している小学校もあった。今回は、健軍小学校、慶徳小学校、五福小学校に協力をお願いして調査を行った。健軍小学校では戦前の詔書、奉安殿の写真等。慶徳小学校では、戦前の通牒類、教育実践の報告等。五福小学校では戦前の卒業記念写真帳、戦後の連合軍司令部指令関係資料等の史料を収集させていただいた。多くの小学校では建て替えや移転などで、古い史料が残っていないといわれる。早期の調査、収集の必要性が感じられた。

2・13～15　近代史料調査（国立国会図書館、東京市政調査会）
2・22　第75回近代専門部会（通史編「近代Ⅲ」の内容構成について）
3・6　近世史料調査（三宅家・仲光家文書）
3・7　近世史料調査（熊本県立図書館）
3・9　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）
3・13　近世史料調査（熊本県立図書館）
3・13～15　近代史料調査（国立国会図書館、東京市政調査会）
3・18　第75回部会長会議（平成13年度事業計画、通史編「近世Ⅱ」「近代Ⅲ」の進捗状況について）
3・20　近世史料調査（三宅家・仲光家文書）
3・25　近代史料調査（筑波大学附属図書館）
3・26　近世史料調査（熊本大学五高記念館）
3・27　先進都市調査（板橋区公文書館、豊島区立郷土資料館）
3・27　近世史料調査（長崎県立長崎図書館）
3・28　全史料協資料保存委員会研修（鳥取県日野郡日野町）
3・30　『市史研究くまもと第13号』発行
4・5　近世史料調査（城南町歴史民俗資料館）
4・13　第67回近世専門部会（通史編「近世Ⅱ」の内容構成）
4・15　近世史料調査（熊本博物館）
4・19　近世史料調査（熊本大学附属図書館永青文庫）
4・20　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）
4・26　第76回近代専門部会（通史編「近代Ⅲ」の内容構成、市史関係資料集第6集について）
5・15　近世史料調査（熊本大学附属図書館永青文庫）
5・18　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容調整、スケジュールについて）
5・21　第76回部会長会議（平成14年度事業計画、通史編「近世Ⅱ」「近代Ⅲ」の進捗状況について）
5・24　第77回近代専門部会（通史編「近代Ⅲ」の内容構成、スケジュールについて）
5・25　ふれあい出前講座（清水公民館：大正～昭和初期の熊本市政について）
5・26　近世史料調査（島田家文書）
5・28　第30回新熊本市史編纂委員会（平成14年度事業計画についてほか）
5・30　近世史料調査（布田家文書）

新熊本市史刊行のお知らせ



わたしたちの郷土・くまもとの歴史がわかる「新熊本市史」を市内主要書店でお買い求めください。書店にない場合など詳しくは、市史編纂室（☎096-328-2038）へお問い合わせください。新熊本市史ホームページ（http://www.city.kumamoto.kumamto.jp/history/index.htm）からもご注文いただけます。

既刊	通史編	第1巻	自然・原始・古代	5,000円
		第2巻	中世	4,300
		第3巻	近世Ⅰ	4,300
		第5巻	近代Ⅰ	4,300
		第6巻	近代Ⅱ	4,300
		第8巻	現代Ⅰ	4,300
		第9巻	現代Ⅱ	4,300
	史料編	第1巻	考古資料	5,700
		第2巻	古代・中世	3,700
		第3巻	近世Ⅰ	3,700
		第4巻	近世Ⅱ	4,800
		第5巻	近世Ⅲ	4,800
		第6巻	近代Ⅰ	4,800
		第7巻	近代Ⅱ	4,800
		第8巻	現代	3,700
		第9巻	新聞 上 近代	3,700
		第9巻	新聞 下 現代	3,700
	別編	第1巻	絵図・地図	10,300
		第2巻	民俗・文化財	5,300
発売予定	通史編	第4巻	近世Ⅱ	平成15年秋
		第7巻	近代Ⅲ	
	別編	第3巻	年表・索引	

新熊本市史編纂委員会の前田信孝委員が去る平成14年8月20日逝去されました。

近代専門部会の部会長として長年ご尽力いただき、新熊本市史では、通史編「近代Ⅰ」「近代Ⅱ」のほか近日刊行予定の同「近代Ⅲ」などにも執筆いただきました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

史料調査にご協力いただいた方々

（敬称略、順不同）

個　人

石井清喜（清水万石）、小野敬太（池亀）、興津景一（水前寺）、島田征一郎（長嶺東）、徳岡　涼（新大江）、徳永　洋（下関市）、内藤トシ子（二本木）、布田正子（横手）、真野豊雄（近見）、三宅久美子（本荘）、宮園昌之（京都府）、村川夏子（東京都）、吉村圭四郎（川尻）

団体・機関

永青文庫、国立国会図書館、筑波大学附属図書館、日本社会事業大学附属図書館、東京市政調査会、熊本大学附属図書館、熊本大学五高記念館、長崎県立長崎図書館、熊本学園大学附属社会福祉研究所、熊本県立図書館、熊本県社会福祉協議会、第一高校清香会、草津町営温泉資料館、城南町歴史民俗資料館、熊本市議会事務局、熊本市立図書館、熊本博物館、旧細川刑部邸、五福小学校、慶徳小学校

日誌抄（続き）

6・8　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）
6・12～14　国文学研究資料館古文書調査（近代史料調査（通史編「近代Ⅲ」の内容調整、資料集について）、近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容調整））
7・17～19　新熊本市史編纂委員会視察研修（川口市・板橋区）
7・26　近代史料調査（通史編「近代Ⅲ」の内容調整、資料集について）
7・30　『熊本市史関係資料集第6集』発行
8・6　別編・年表編集会議
8・10　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）
8・26　近代史料調査（通史編「近代Ⅲ」の内容調整）
9・4　九州地区著作権セミナー出席（長崎市）
9・5　第77回部会長会議（通史編「近世Ⅱ」「近代Ⅲ」の進捗状況について）
9・14　第68回近世専門部会（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）
9・20　第78回近代専門部会（通史編「近代Ⅲ」の内容調整）
10・4　近世史料調査（仲光家文書・追加分）
10・8　別編・年表編集会議
10・12　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）
10・16～18　全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会出席（富山市）
10・25　近代史料調査（通史編「近代Ⅲ」の内容調整）
11・9　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）
11・22　近代史料調査（通史編「近代Ⅲ」の内容調整）
12・3　第78回部会長会議（通史編「近世Ⅱ」「近代Ⅲ」の進捗状況について）
12・13　第79回近代専門部会（通史編「近代Ⅲ」の内容調整）
12・14　近世史料調査（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）
平成15年
1・11　第69回近世専門部会（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）
1・17　近代史料調査（通史編「近代Ⅲ」の内容調整）
2・8　第70回近世専門部会（通史編「近世Ⅱ」の内容調整）